

くろうるしこんどうそうくうでん ほうらいさんとうしょうぐうほんでんのうち  
 黒漆金銅装宮殿（鳳来山東照宮本殿納置）

<概要>

員数	1基
法量	総高 220.7cm
時代	江戸時代初期

江戸幕府の3代将軍徳川家光は鳳来山に東照宮の造営を計画し、慶安4（1651）年に社殿が完成した。この東照宮の本殿内陣に置かれるのが黒漆金銅装宮殿で、江戸城紅葉山<sup>1</sup>の東照宮のものを移したとの社伝がある。宮殿の内部には帳台を置き、東照権現像を安置する。

宮殿は木造、入母屋造<sup>2</sup>、妻入<sup>3</sup>、木瓦葺で、総体に黒漆を塗り、おびただしい数の金銅製<sup>かざり</sup>銚金具を打つ。この金具が、三葉葵紋と牡丹文<sup>ぼたんもん</sup>を主文様とする本殿扉周辺の金具と意匠を異にしている点と、三葉葵紋の茎の形状や葉の葉脈表現などから、本殿より相対的に古い時期の製作をうかがわせる。また、本殿内陣の扉に比べて宮殿が不釣り合いに大きく、屋根後方の本殿に掛かる部分が大きく切り欠かれ、金具も不自然な切り欠きを行っていることも総合すると、宮殿が江戸城紅葉山東照宮から移設されたとの社伝は信憑性が高い。

以上のように、本宮殿は江戸時代初期の荘厳な霊廟の典型を示していて、現存する東照宮関係の宮殿・建造物でも非常に早い作例である可能性が高く、近世工芸史のきわめて重要な基準作といえることができる。また鳳来山東照宮の造営経緯を具体的に物語る史料価値も大きい。これらのことから、愛知県指定有形文化財（工芸品）として指定するものである。

1 江戸城の本丸と西丸の間にある小丘。

2 屋根が上部においては切妻造（長辺側から見て前後2方向に勾配をもつ）、下部においては寄棟造（前後左右四方向へ勾配をもつ）となる構造をもつこと。

3 建物の妻側（棟と直角の方向になる側）に出入口のあるもの。



黒漆金銅装宮殿（鳳来山東照宮本殿納置）（愛知県提供）